

(6) 商業空間における健康啓発活動の検討 — 薬物使用・身体・親密性・文化的実践の交差に注目して —

研究分担者：大島 岳(明治大学)

研究協力者：小田 史彦

研究 要 旨

本研究は、薬物使用当事者のヘルスプロモーション実現に向け、医療機関や支援団体の外側に広がる商業空間・文化的実践の場に注目し、薬物使用・身体・親密性・コミュニティの関係が交差する生活世界の中で健康行動がどのように形成されているのかを質的研究の視点から検討するものである。厚生労働科学研究費によるエイズ対策研究はこれまで疫学調査・医療体制整備・予防介入評価を中心に発展してきたが、当事者が日常生活の中でどのように健康行動を経験しているかという生活世界の側面は十分に研究されてこなかった。本研究はこの空白を補完し、健康支援の新たな実践領域を可視化する探索的試みとして位置づけられる。

本年度(基盤形成期)は、3つの活動を実施した。① Asia Pacific Chem-use Symposium 2025 (クアラルンプール、2025年11月19～20日)参加、②世界エイズデー映像上映会・トークセッション(東中野・Space & Cafe ポレポレ坐、2025年12月1日、約60名参加)、③ White Party Bangkok 2025 参与観察(2025年12月27～31日、バンコク)である。

3つの研究実践を通じてハームリダクションの3つの実装形態(制度的・コミュニティ主導型・内在的)を区別し、特に商業空間に内在する『内在的ハームリダクション(intrinsic harm reduction)』という分析概念を提示した。また日本では『語れなさ』の構造が健康課題の共有を妨げており、映像上映という文化的媒介がその緩和に有効であることを確認した。

A 研究目的

エイズ対策政策研究の中心課題として、HIV感染者・薬物使用当事者へのヘルスプロモーション実現がある。厚生労働行政においては、薬物依存症対策の推進、HIV/AIDS対策の充実、及びLGBTQ+を含む多様な当事者への包括的支援体制の整備が重要課題とされている。しかし、既存の研究・対策は主として医療機関・専門支援機関を通じた介入に集中しており、支援につながりにくい層が日常的に集うゲイバー・クラブ・サウナ等の商業空間における健康支援の実態は十分に把握されていない。

本研究は、医療機関や支援団体の外側に広がる商業空間や文化的実践の場に注目し、薬物使用・身体・親密性・コミュニティの関係が交差する生活世界の中で健康行動がどのように形成されているのかを質的研究

の視点から検討するものである。特に、医療制度や支援団体の外側に位置する文化的・商業的空間において健康啓発やハームリダクションがどのように成立するのかを検討し、厚生労働行政における今後の支援政策への実証的な根拠を提供することを本研究の中心的課題とする。

近年、性的文脈における薬物使用(Chemsex)はHIV感染予防、精神健康、依存症支援、薬物政策といった複数の領域が交差する公衆衛生課題として国際的に注目されている。一方、日本においては薬物使用に対する強い犯罪化と社会的スティグマの影響により、当事者の生活経験やコミュニティにおける実践を対象とした研究はきわめて限られている。本研究は従来のエイズ対策研究を補完し、健康支援の新たな実践領域を可視化する探索的試みとして位置づけられる。なお、本研究は薬物使用を推奨するものではなく、現実

在する行動を前提に健康被害を最小化する支援の可能性を検討するものである。

B 研究方法

本年度は基盤形成期として、マルチサイト民族誌的アプローチ(multi-sited ethnography)を基本方法論に採用し、以下の3つの活動を実施した。参与観察・会議記録については民族誌的記述により分析し、上映会アンケートの自由記述はテーマ分析(thematic analysis)を用いて整理した。

(1) APCS 2025 参加(2025年11月19～20日、クアラルンプール)

アジア太平洋地域のケムセックス研究・支援実践の国際的動向を把握するため、Asia Pacific Chem-use Symposium 2025に参加した。研究発表の聴講、支援モデルに関するパネル討議への参加、会議外の医療施設視察(KitaKita Clinic)・コミュニティイベント観察(Blueboy Pub & Restaurant)・支援団体訪問(Malaysian AIDS Council)を行い、アジア各国の制度的・コミュニティ的ハームリダクション実践を記録した。

(2) Day With(out) Art 2025 映像上映会+トークセッション(2025年12月1日、東中野)

日本国内において薬物使用やHIVをめぐる語りがどのように成立するのかを検討するため、映像上映会とトークセッションを実施した。Visual AIDSによる「Day With(out) Art 2025」(Meet Us Where We're At) 6作品の日本初上映を行い、上映後に倉田めばさん(大阪ダルク創設者・メンタルヘルスソーシャルワーカー・パフォーマンスアーティスト)とDJ POIPOIさん(DJ・イベントオーガナイザー)をゲストに迎えたトークセッションを実施した。日時：2025年12月1日(月) 20:00～ 会場：東中野・Space & Cafe ポレポレ坐 主催：ノーマルスクリーン 協賛：厚生労働省 厚生労働科学研究費補助金 参加者数：約60名(立ち見あり)

上映された6作品の制作国・テーマ(上映順)：作品1(ナイジェリア・ラゴス)支援団体への警察介入・スティグマと当事者の不可視化／作品2(ベトナム)

トランスジェンダー女性の医療アクセス困難と孤立／作品3(チリ／ブラジル)キアコミュニティのカーニバルを媒介とした解放・接続・親密性／作品4(ブラジル／ポルトガル)ケムセックスの生々しい実践と参加者による相互ケア(chempassion)／作品5(ペルー／ドイツ)公園に集う薬物使用者の不可視化を「幽霊」に喩えた詩的表現／作品6(プエルトリコ)パフォーマンスアートを通じた身体表現・快楽・回復・孤立

上映・トーク後に匿名アンケートを配布し、感想・年代・来場経路・満足度・関心の深まり・日本のハームリダクションへの意見を収集した(有効回答数：9件)。

(3) White Party Bangkok 2025 参与観察(2025年12月27～31日、バンコク)

国際的なキア商業イベントであるWhite Party Bangkok (WPBKK)に参加観察として参加し、①入場管理における安全対策の構造、②医療・救急体制の配置と運営、③薬物使用に関する商業空間側の対応様式、④インフォーマルなハームリダクション実践の可視化、の4点に着目した現地調査を実施した。計4ナイトイベント(AGM・Jock Ball・Main Event・Countdown Party)およびTRIBE Sky Beach Club プールパーティに参加した。スタッフへのインタビューは口頭了解のうえ英語にて実施した。開催地：バンコク(タイ) Paragon Hall (Siam Paragon 5F)ほか複数会場 規模：40,000人以上・120カ国以上からの参加者 主催：Cloud 9 Inc. 連携：PULSE Clinic (公式健康スポンサー・HIV検査・PrEP提供。タイを拠点とするキア経営の性的健康クリニックネットワーク。バンコク・香港・クアラルンプール・シンガポール・マニラ等アジア全域30拠点以上)・APCOM

(倫理面への配慮)

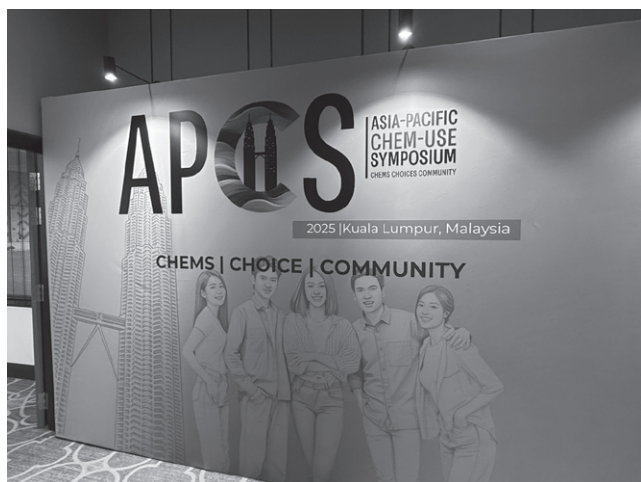
本年度は介入研究・臨床研究は実施しておらず、人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針(令和3年文部科学省・厚生労働省・経済産業省告示第1号)に定める倫理審査が必要な研究には該当しないと判断した。その理由：①映像上映会・参与観察はいずれも公開イベントへの参加・観察であり、特定個

人を研究対象として意図的に抽出・介入する行為は行っていない。②アンケートは任意・匿名で実施し個人が特定される情報の収集は行っていない。③参与観察では顔部分を匿名加工し参加者個人のセンシティブな情報の聴取は行っていない。④スタッフインタビューは口頭了解のうえ実施した。参加者の尊厳・プライバシーの尊重を徹底し、違法薬物に関する内容は非審判的立場を明確にした。動物実験は実施していない。

C 研究結果

【研究実践1：APCS 2025 (Asia Pacific Chem-use Symposium)参加】

1-1. 概要



▲ 会場：Hotel Royal Signature (クアラルンプール)

1-2. はじめに

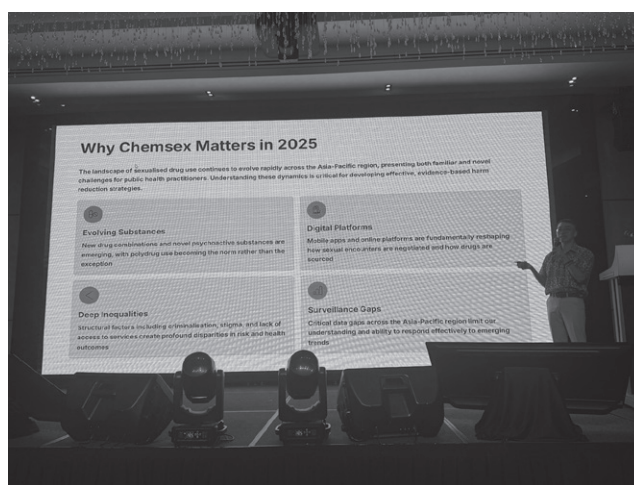
APCS 2025 は、アジア太平洋地域におけるケムセックス(性的文脈での薬物使用)という複合的現象に対し、HIV / STI 予防・治療、精神健康、依存症支援、薬物政策・法制度、コミュニティによる実践、人々の日常生活経験に関する社会学的分析が交差する学問横断的な国際会議である。2025 年の会議は、ケムセックスを「快楽か危険か」という二分法ではなく、孤独・承認・身体感覚・社会的な立場・法律・政治を含む多層的な実践として理解しなおす点に焦点が置かれた。

1-3. 各発表の内容

(1)ケムセックスの概念化と地域の状況

■ Mr. Howie Lim (University of Malaya) 「アジア太平洋の Chemsex：生活、孤独、スティグマ」

Howie は、アジア地域でのケムセックスがアプリ・SNS・オンラインショッピングサイトによって強く媒介されており、孤独・同性愛への社会的偏見を自分自身に内面化することで生じる自己否定感・ストレス・うつ・性的承認への欲求・「自分らしさ」の回復といった心理社会的背景が使用動機に深く関わると述べた。ケムセックスは単なる「薬物リスク」ではなく、個人の苦悩と快楽、社会的抑圧、文化的実践が交差する現象として位置づけた。



▲ Howie Lim 氏の発表資料

■ Mr. Bo Justin Xiao (ACON, Australia) 「ピアサポートの実践と4種類の動機」

Bo Justin は、ACON での15年以上の経験に基づき、ケムセックスの動機を①快楽・探究、②対処行動(coping)、③社会規範(「ゲイコミュニティでは普通」という圧力)、④依存、の4つに整理した。依存支援を「禁欲ゴール」に固定するのではなく、ピアが伴走しながら本人の希望と準備度に合わせる支援が効果的であると強調した。

(2)メンタルヘルスと統合ケアモデル

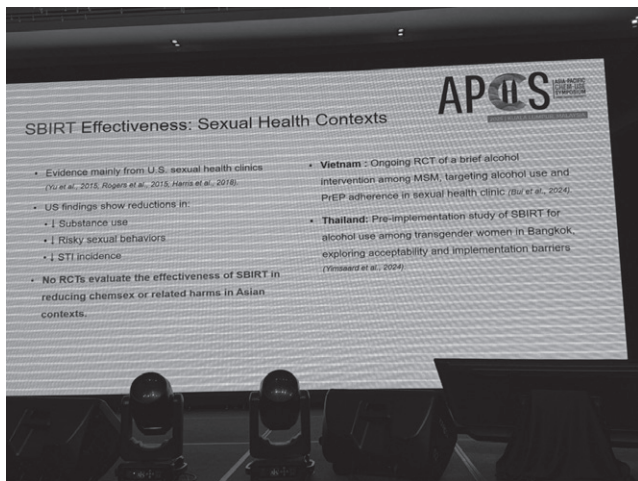
■ Dr. Nor Hazlin binti Talib (Malaysia, Batu 9 Health Clinic) 「AHOPCA：プライマリケアを基盤とした統合モデル」

Hazlin は、マレーシアの AHOPCA (One-Stop Center for Addiction) を紹介した。全国111拠点で運営され、HIV / STI 診療・精神科・依存症治療・

心理支援(CBT等)・家族支援・社会復帰支援をワンストップで統合するモデルである。NGO(アウトリーチ)→AHOPCA(治療・安定化)→NGO(継続支援)という循環構造で早期介入と継続支援を実現している。「人は安全を感じたとき、初めて来院する」という言葉が象徴的であった。

■ Dr. Pongkwan Yimsaard (タイ、King Chulalongkorn Memorial Hospital)「HR-SBIRTのハームリダクション化」

Pongkwanは、従来のSBIRT(Screening, Brief Intervention, Referral to Treatment)を、ケムセックス文脈に合わせて「禁欲一択ではないSBIRT」へ転換する必要性を強調した。EACS 質問票・UNODC Asia-Pacific Chemsex Toolkit・動機づけ面接(MI)などを活用し、本人の価値観と準備度を尊重した非審判的で現実的な当事者中心の支援の基準を示した。



▲ HR-SBIRT に関する発表資料

(3) Oral Abstracts：生活世界の視点

■ Tahjai Arnold(National Taiwan University)「ありふれたケムセックス：沈黙・規範・日常性」

台湾での30名のMSMを対象にした参加観察型の質的研究では、ケムセックスが「危険行動」ではなく「ありふれた日常実践」として成立していることが示された。Shopeeが器具を自動推薦する・サウナで体温・視線がメッセージとして交わされる・セッション中の抗HIV薬(ART)の貸し借りという相互扶助・「沈黙」が意味を持つ関係性の構造などが描かれ、ケムセックスを理解するためには人々の日常的な生活経験・身体感覚・感情・社会規範の分析が不可欠であることを示した。

(4) Oral Abstracts：コミュニティ主導の実践

■ Tien Wei Long (PT Foundation, Malaysia)「参加型デザインによるHarm Reduction Party Pack (ARTPACK)」

Modified Nominal Group Technique (NGT)により、使用者自身が必要な減害物品を選び、17項目のパーティパックを共同設計した。耳栓・アイマスク・ストレスボールなど精神的グラウンディングを支える道具が選ばれたことが特徴的であった。

■ Yiu Ching Tak (NJKC Studio, Hong Kong)「深夜のピアサポート：ケムセックス危機下の香港から」

香港では政府の予算削減でケムセックス関連事業が60%縮小し、支援の空白が生まれている。弁護士・医療従事者など中年の専門職MSMが深刻な孤立に陥っている現状を報告。支援の核心は「相手の隣に座り、その夜を一緒に乗り越える」という共同学習(co-learning)モデルであると述べた。

(5)法制度・政治環境の構造的課題

Nikolay Lunchenkov (ドイツ/カザフスタン)他によるパネルでは、アジアの一部の国で「薬物使用×同性愛の二重犯罪化」が健康アクセスと安全を阻害する最大要因であることが強調された。マレーシアでは薬物関連で摘発されると生涯犯罪者として記録される、フィリピンでは「Drug user = 悪」という語りが暴力を正当化する、ベトナムは2025年に薬物使用を条件付きで再び犯罪化した。パネリスト全員が「犯罪化→恐怖→医療回避→データ欠如→政策不在」という悪循環の深刻さを指摘した。

(6)最終パネル「コミュニティは戦略である」

最終パネルでは、①コミュニティは「アクセサリー」ではなく「戦略そのもの」、②AHOPCAのような統合ケアの制度化、③Global Fund 予算縮小の中でのケムセックスの政策アジェンダ化と資金確保、の3点が共有された。「2025～26年は分岐点」との認識が示された。

1-4. 会議外の視察・交流

11月21日：クアラルンプール市内の KitaKita Clinic を訪問。LGBTQ+ フレンドリーな医療実践について聴取した。

11月22日(深夜)：地域唯一のLGBTQ+ 向けバー「Blueboy Pub & Restaurant」で開催されたコミュニティイベントを観察。ドラッグクイーンのショータイム後、Alleviate Malaysia の代表によるスピーチが行われた。HIV 検査のアウトリーチ、PrEP (HIV 感染予防投薬) サポート、コミュニティ・キッチン設立などの取り組みが紹介された。

11月22日：The Malaysian AIDS Council & The Malaysian AIDS Foundation 訪問。Needle & Syringe Programme (NSP)、Methadone Maintenance Therapy (MMT) との連携、SNS を含むアウトリーチ活動、PWID・MSM・トランスジェンダー女性・女性セックスワーカー・移住労働者等への中間支援の実態を把握した。



▲ 参加者との交流(夕食会)

1-5. 分析と示唆

本調査では、3つの水準の交差に着目する分析枠組みを採用する。第一は制度的支援(医療・政策・支援団体)の水準、第二はコミュニティによる相互ケアの水準、第三は商業空間における文化的実践の水準である。

APCS 2025 から本研究との関連で特に重要な示唆は以下のとおりである。ケムセックスは孤独・承認・身体感覚・社会構造が交差する現象であり単純なリスク教育では対応できない。統合ケアモデル(AHOPCA 等)は有効であり包括的な制度化が求められる。HR-SBIRT のように「安全な使用」を含む現実的な支援が国際的に標準化されつつある。コミュニティが現場で積み重ねてきた知恵と実践(仲間同士の支え合い・感情面でのケア)は支援の中心戦略である。二重の犯罪化はケアへのアクセスを阻む最大要因であり日本においても「犯罪化→語りにくさ」の構造を可視化する必要がある。地域発の質的研究が政策形成の基盤となる。

日本は APCS 各国の一部で深刻な「二重犯罪化」の



▲ KitaKita Clinic 訪問



▲ Blueboy Pub & Restaurant でのコミュニティイベント



▲ Malaysian AIDS Council 訪問

状況にはないが、薬物使用者へのスティグマは依然として存在し、クィアコミュニティにおける「語れなさ」の構造と結びつくことで支援へのアクセスを阻む。ゲイバー・クラブ・サウナといった商業空間は、NPOや自助グループとは異なる匿名性と敷居の低さを持ち、支援につながりにくい層が日常的に集う場として独自の社会的機能を担っている。しかし日本では、こうした商業空間に健康支援やハームリダクションを制度的に組み込む実践はまだ十分に発展していない。

【研究実践2：Day With(out) Art 2025 上映会＋トークセッション】

2-1. 研究目的

本研究は、商業空間において違法薬物と関わる健康啓発およびハームリダクションを、映像上映と対話を中心とした文化的実践として検討することを目的とする。とりわけ、世界エイズデーに実施した映像上映会を通じて、薬物使用・HIV・メンタルヘルス・スティグマといったテーマが日本社会においてどのように語られ、どのような点で語られにくさを抱えているのかを明らかにする。国際的に共有されているハームリダクションの視点と日本に固有の制度・文化的制約とのずれを可視化し、今後の政策的・実践的検討に資する課題の発見を目指す。

2-2. 結果

(1) 参加状況

本上映会は事前予約の段階で定員に達し、当日は満席を超え立ち見(60名強)も出るほど盛況であった。このことから、違法薬物と関わる健康啓発やハームリダクションについて、日本においても高い潜在的関心と対話ニーズが存在することが示唆された。TOKYO AIDS WEEKS との連携により、HIV 陽性者・医療従事者・支援者・当事者・研究者・一般市民が同じ商業文化空間に集まり対話する機会が生まれた。

(2) 上映を通じて浮かび上がった知見

上映された6作品は各国において薬物使用・HIV・スティグマ・ケアが生活や関係性の文脈で語られており、上映後の対話では「日本では同様の語りが公共空間で成立しにくい」という指摘が複数の参加者から共有された。特に対話が深まったのは、作品5(ドイツ・

ベルリン)の「幽霊」と作品1(ナイジェリア・ラゴス)の二作品をめぐってであった。「幽霊」の比喻に対して倉田めばさんは「社会が作り出したスティグマによって自分が幽霊にされる」と応じ、その言葉にうなずく参加者が多く見られた。

APCS(クアラルンプール)で得られた国際的知見と照合することで、日本ではハームリダクションが医療・支援の内部でも周知が不足しているだけでなく、文化的・商業的空間へと十分に展開されていない状況が確認された。映像という間接的メディアを経由することで、参加者が自己検閲を一時的に緩め語りのリスクを分散しながら共有できたと解釈できる。

(3) トークセッションで共有された知見

【孤独・つながり・コミュニティ】

DJ POIPOIさんは、ブラジルのクィアコミュニティがカーニバルを「解放」として意味づける文脈を、自身のブラジル滞在・父の死・クィアコミュニティとの交流経験と重ね合わせて語った。また新宿二丁目での勤務経験から、発展場を標的にした警察の張り込みや薬



▲ トークセッション(左:DJ POIPOIさん、中:倉田めばさん、右:手話通訳)



▲ 会場との対話の様子

物使用者へのスティグマが世界共通の問題であることを述べた。救急隊員が薬物使用者への対応を想定していない現実を指摘しつつ、情報と制度の空白を当事者コミュニティの経験知が補完しているという現状を指摘した。

倉田めばさんは、最初の作品に描かれた「自由になりたいくて薬を試みるが結局孤立する」という語りを「いつもの話」として受け止め、大阪ダルクでの40年以上の実践から完全断薬プログラムとハームリダクションを同一施設で並行する困難を語り、「命綱として薬を使っている人に最初から「ダメ絶対」と言うことの矛盾」を指摘した。また自身がトランスジェンダーであることを踏まえ、戸籍上の性別と身体の乖離によって公的医療へのアクセスが阻まれる現実を具体的に述べた。

【「語れなさ」の構造】

トークや質疑応答で交わされた「薬物使用を勧めるわけじゃないけど」という前置きが象徴するように、日本においては薬物について語る語彙・語り方そのものがきわめて限られている。薬物について語ること自体が「推奨」や「擁護」として解釈される可能性がある状況では、語り手は発話の冒頭であらかじめ否認を示し自らの立場を調整する必要に迫られる。この構造そのものが日本社会における健康課題の共有を困難にしている。

【商業空間・コミュニティの可能性】

DJ POIPOIさんは、「LGBTQというカテゴリーだけでなく、ただ単にどのような人でも肯定できる場」としてのパーティ・コミュニティの意義を語った。倉田めばさんは「たった一人でも自分を肯定してくれる人がいれば生きていける」と繰り返し、コミュニティの役割を「たった一人を見つける場所」として位置づけた。

(4)参加者アンケート集計結果(有効回答数：9件)

上映・トーク満足度：非常に満足7件(78%)、満足2件(22%)、やや不満0件 関心・理解の深まり：とても深まった6件(67%)、やや深まった3件(33%)

年代：20代4件・30代2件・40代1件・50代1件

【主な自由記述から】

「罪をベースに見る／見られる時に、ひとりの人の思いや置かれてる状況が考えられないままになってしまう。一緒に悩める環境が必要」(30代)

「行政側に理解がないことが大きな問題。個人のコンディションが多様で助けが必要な状況に対して切り捨てない現場のシステムや民間の理解を進める教育を進めてほしい」(30代)

「日本に生まれ育った身としては、典型的な「ダメ、絶対」精神に疑問を持ち続けてきた。この疑問、現実と国の理想のギャップを埋めてくれるのがハームリダクション」(20代)

「脱犯罪化：取り締まりの対象から支援の対象に。薬物使用による急患への対応を制度化し、周知させることがまず重要」(20代)

「薬物の使用を完全に否定しないと「推奨している」ことにされてしまう謎。語る言葉・語り方の少なさが大きな問題」(20代)

「より広く実践されるといいと思ったが、日本の現状が「変わる」のを全く想像できない。しかし、変わってほしい」(20代)

2-3. 考察

上映会が満員となった事実は、日本社会においても違法薬物やハームリダクションへの高い潜在的関心と対話ニーズが確実に存在することを示している。一方で、その関心が日常的・継続的な対話や実践へと接続される場は極めて限られており、上映会という一回性の場に需要が集中する構造自体が、日本における語りの場の欠如を反映している。

商業的文化空間を活用することで、医療機関や支援施設とは異なる「敷居の低い対話の場」が成立したことは、本研究の方法論的な有効性を示している。本年度の3つの活動は、それぞれ異なる文脈から「語れなさの構造とその緩和」という共通の問いへと収束している。APCSが示した統合ケアモデルと「コミュニティは戦略である」という認識は、WPBKKの場の組み立てにおいて文化的実践の形を取り、上映会はその日本における萌芽的实践として位置づけられる。

【研究実践3: White Party Bangkok 参与観察報告】

3-1. 研究目的と意義

グローバル化の進展にともない、親密性のあり方は大きく変容しつつある。本研究は、バンコクの商業空間を先行事例として位置づけ、親密性の変容が進む場においてハームリダクションと健康支援がどのように実装されているかを参与観察によって把握することを目的とした。その知見をもとに、日本における商業空間でのウェルビーイング支援のあり方と必要な方策を検討するための比較基盤を構築することが、本研究の意義である。

3-2. 先行研究：クィアナイトライフを研究対象とすることの意義と困難

Ghaziani (2025)は、クィアナイトライフ研究が社会学において「dirty work (汚れ仕事)」として扱われてきた歴史を指摘する。性的実践や夜の空間を研究対象とすることは、ホモフォビアを薄く纏った学術的批判にさらされ続けてきた。こうした構造的な排除により、クィアナイトライフで何が起きているか、どのような実践・関係性・文化・健康行動が生まれているかは、社会科学的に可視化されにくい状態に置かれてきた。

しかし、Ghaziani (2025)はこの「居心地の悪さ (discomfort)」を、既存の規範を内側から変革する機会として再定位する。ゲイバー・クラブ・サーキットパーティといった空間は、単なる娯楽の場ではなく、クィアの人々が日常生活を営み、自己のあり方・他者との親密な関係・文化的な実践を形作る「社会的な基盤」となっている。

Francioni (2023)は新宿二丁目のゲイバーを対象にした参加観察研究において、クィア商業空間で働く人々の独特のふるまい方を分析している。ゲイバーのママは、目の前の人々が安心してその場で過ごせるように「今夜この人に必要な自分」をあえて演じる。自分の一部を一時的に退かせることで相手への気遣いを実現するこのふるまいは、他者への深いケアの表れである。

Hilderbrand et al. (2025)が編集した学問横断的なフォーラムでは、ナイトライフが単なる娯楽空間ではなくクィアの人々が自分たちの世界を自ら作り出す (world-making) 場であるという認識が共有されている。McCormack & Measham (2025)は、ロンド

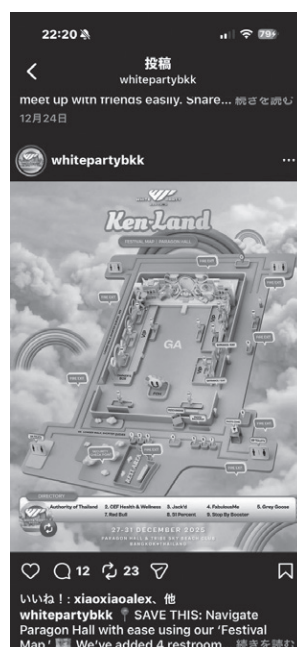
ンのクィアナイトライフが COVID-19 後に「メインストリーム化と商品化」の矛盾に直面していることを明らかにしており、WPBKK の観察もこうした緊張関係を念頭に置いて行った。

3-3. WPBKK の概要

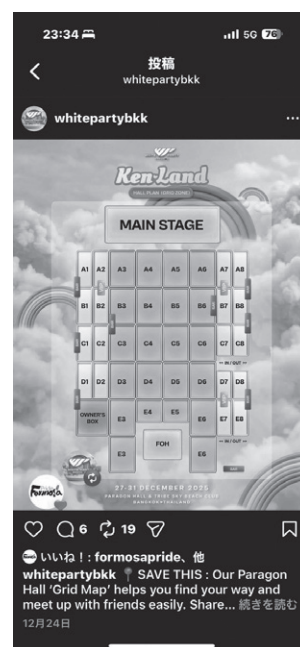
開催地：バンコク(タイ) Paragon Hall (Siam Paragon 5F) ほか複数会場 会期：2025 年 12 月 27 日(土) ~ 31 日(水) (年越しイベント) 規模：40,000 人以上・120 カ国以上からの参加者(アジア最大のゲイ・ニューイヤーフェスティバル) 主催：Cloud 9 Inc.(タイ最大手ライブ・イベントプロデュース会社) 歴史：2015 年開始、2018 年 CircuitX「Circuit Party of the Year」受賞

プログラム：AGM (Annual Gay Meeting)、Military Ball、Beefy Bear Ball、Jock Ball、Main Event、Countdown Party の全 6 イベント 連携：PULSE Clinic (公式健康スポンサー・HIV 検査・PrEP 提供)・APCOM (HIV 検査アウトリーチ担当)

タイの文脈：2025 年 1 月に「結婚平等法」施行。タイは東南アジアで初めて同性婚を法制化した国となった。



▲ 会場マップ「Ken-Land」
(公式 Instagram)



▲ グリッドゾーンマップ
(公式 Instagram)

公式 SNS で事前公開された会場マップとグリッドゾーンマップ。Security Check Point の位置、VIP エリア、複数の出口が明示されており、スポンサー

覧には「CEF Health & Wellness」が含まれる。格子型マップは参加者同士の待ち合わせを補助するナビゲーションツールであり、大規模イベントにおける空間管理と参加者の自律的行動を事前段階から支える基盤となっている。



▲ Paragon Hall (入口)



▲ Paragon Hall (メインフロア)



▲ TRIBE Sky Beach Club (プールパーティ会場)



▲ スタッフ色分けによる役割の可視化(TRIBE 会場)

2025 年のテーマ「Ken-Land」は、Barbie 映画 (2023) の「Kendom」への文化的参照を含んでいる。「すべての参加者が Ken である」というコンセプトのもと、マッスル Ken・グラム Ken・レザー Ken・ドラッグ Ken・ベアー Ken など多様な身体表現が観察された。



▲ イベント周辺の街の様子(タニヤ通り)

Siam Paragon 近隣の Silom 地区タニヤ通りの深夜の様子。日本語の看板が多く見られる日本人向け歓楽街に、WPBKK 参加者も含まれる若い男性たちで溢れている。大規模商業イベントが周辺の都市空間にも影響を与え、異なる商業文化が交差する様子が観察された。

3-4. 研究の焦点と方法

本調査は、大規模国際商業イベントにおけるハームリダクションの実装形態を参与観察・記録することを目的とした。具体的には、①入場管理における安全対策の構造、②医療・救急体制の配置と運営、③薬物使用に関する商業空間側の対応様式、④インフォーマルなハームリダクション実践の可視化、の4点に着目して現地調査を行った。調査期間は2025年12月27日～31日の5日間で、計5イベントに参加した。観察は参加観察の形式で実施し、調査ノートへの即時記録・写真撮影・動画記録を組み合わせた。

3-5. 参与観察で得られた知見

(1)入場管理：安全配慮の多層構造

WPBKKの各会場では、入場時に金属探知機および手荷物検査を含む入念なボディチェックが実施される。特筆すべきは没収されたものの扱いである。没収物はイベント終了後の出口付近に置かれており、本人が退場時に持ち帰ることができる。これは、没収行為が「罰」や「摘発」を目的とするものではなく、イベント空間内のリスク管理を目的とした実用的な措置であることを示している。

スタッフは蛍光黄色ベストのセキュリティと全身緑色の医療スタッフに明確に色分けされており、参加者は一目で役割を識別できる。複数会場にわたる動線上に医療スポットが配置されており、「助けを求めに行く」ではなく「動いていたら自然に支援につながる」構造が実現されていた。また、電子リストバンドによる

入場管理・キャッシュレス決済システムが導入されており、参加者の安全を両立させる実用的な仕組みとなっていた。

入場口には「RULES & REGULATIONS」掲示板と「WARNING」掲示が並べて設置されており、薬物禁止・ゼロトレランスが英語・タイ語・中国語の3言語で告知されていた。しかし注目すべきは、ルール掲示板のスポンサー一覧に「PULSE CLINIC」が明記されていることである。公式には薬物使用のゼロトレランスを掲げながら実際の運営では現実的な健康支援を制度的に並行させるという二層構造が、これら掲示物の並置に象徴的に現れている。



▲ 入場券事前登録システム
(公式 Instagram / @whitepartybkk)



▲ RULES & REGULATIONS (PULSE CLINIC 協賛明記)



▲ WARNING 掲示(3言語対応)

(2)薬物使用のありふれた日常性

APCS2025のTahjai Arnold（国立台湾大学）が示したように、大規模なクエア商業イベントにおいて薬物使用は「危険行動」としてではなく「ありふれた日常実践」として成立している。WPBKKの観察においても同様の文脈が確認された。参加者の多くは薬物使用に対して過度の隠蔽や恐怖を示すことなく行動しており、使用の有無にかかわらず同じ空間で共存していた。

体調が悪化した参加者に対しては、仲間が背中をさすり、水を手渡し、意識が遠のかないよう声をかけ続ける場面も観察された。座り込もうとする人を支えて

立たせ、フロアの端や涼しい場所へ誘導する行為は、特定の誰かが担うのではなく近くにいた複数の人が自然に関与する形で行われた。こうしたインフォーマルなケアの実践は、事前に取り決められたものではなく、その場その場で立ち上がるものであり、コミュニティが経験知として積み重ねてきた相互扶助の表れとして理解できる。

フロアでは様々な体型・年齢・国籍の参加者が半裸や個性的な服装で過ごす光景が広がっており、通常の商業施設とは異なる身体規範が成立していることを示している。



▲ ゴーゴードンサーによるショータイム(White Party)



▲ レーザー演出(Paragon Hall)



▲ 空中パフォーマー（ショータイム）



▲ メインフロアの様子(最混雑期)



▲ プールパーティの夜間(ホログラム演出)

(3)救急・医療体制：可視化による非公式ハームリダクション教育

会場内には医療拠点(ファーストエイドチーム)が設置されており、看護師・救急救命士・救急医療対応スタッフで構成されたチームが常駐していた。体調不良の参加者への処置が隠されることなく可視化されていた点が特に重要である。フロアからの退場路・動線上に位置する FIRST AID スペースにおいて、水を飲ませる・仲間が声をかける・スタッフが穏やかに対応するという行為がフロアと接続した開かれた空間で行われることで、周囲の参加者にとって「こういうときはこう対処する」というインフォーマルなハームリダクション教育が自然に行われていた。

注目すべきは FIRST AID の掲示デザインである。WPBKK のカラフルなビジュアルアイデンティティに統一されたポップな標示が用いられており、「緊急・治療」の場としての威圧感を排した設計となっている。「助けを求めやすくする」という意図的なデザイン選択として読み取れる。



▲ FIRST AID 室の入口(Paragon Hall)



▲ FIRST AID 標示とスタッフ(TRIBE 会場)

メインイベント終了直後には、薬物の影響と思われる状態の参加者が照明装置のトラスによじ登ろうとした際、SECURITY スタッフと MEDICAL スタッフが即座に集まり、声をかけながら穏やかになだめる形で対応しつつ、安全性を考慮し冷静に静止していた。こうした事態への対処方法が、参加者間で非公式に共有される場面であった。



▲ 照明トラスによじ登ろうとする参加者への非暴力的対応
(メインイベント終了直後)

スタッフの配置にも、ハームリダクション的な思想が反映されていた。警備員はフロアの「外側」ではなく、参加者の中に分散して立つ形で配置されており、異変への早期対応と「助けを求めやすい距離感」が同時に確保されていた。最も象徴的だったのは、緑の制服を着た医療スタッフ2名が、緑のLEDで照らされたメインステージのアーチ前に立っている場面である。制服の色がステージ照明と完全に一致しており、まるでパフォーマンスの演出の一部であるかのように会場に溶け込んでいた。



▲ メインフロアに分散配置されたスタッフ



▲ 医療スタッフ・ステージ緑照明と視覚的に同化
(メインフロアに分散配置されたスタッフ)

(4)ハームリダクションの制度的組み込み：PULSE Clinic との連携

WPBKK は公式スポンサーとして PULSE Clinic (以下、PULSE) との連携を組み込んでいる。PULSE はタイを拠点に設立されたクイア経営の性的健康クリニック・ネットワーク(PULSE Social Enterprise) であり、アジア全域に 30 を超える拠点を展開している。具体的には、バンコク市内(Silom 本部ほか複数拠点)、プーケット、チェンマイ、コサムイ、パタヤ、香港、クアラルンプール(複数)、ペナン、シンガポール、マニラなどに展開しており、累計 45,000 人以上・130 カ国以上の利用実績を持つ。PULSE の特徴は、「非審判的・人道的・非スティグマ化サービス(friendly humanized non-stigmatizing service)」を理念として掲げ、「Here to help, not to judge (助けるために存在する、裁くためではない)」という方針のもと、HIV 陽性者・薬物使用者・セックスワーカーを含む多様な当事者が安心してアクセスできる環境を整備している点である。提供サービスは、HIV 迅速検査(99.9%の精度で結果が 20 分以内に判明)・PrEP (曝露前予防投薬)・PEP (曝露後予防投薬)・抗レトロウイルス療法(ART)・STI 検査・治療・トラベルメディスン・予防医療・メンタルヘルス相談など多岐にわたり、WPBKK では会場内外で HIV 検査・PrEP 案内・STI 検査を提供していた。このような「非審判的かつワンストップ型」の性的健康サービスが大規模商業イベントに制度的に組み込まれていることは、内在的ハームリダクションの実装形態として重要な意味を持つ。

APCOM の TestBKK プログラムは、2015 年から 2019 年にかけて WPBKK で HIV・梅毒迅速検査アウトリーチや連携クリニック情報の配布を継続的に実施してきた。しかし 2025 年 1 月 20 日、トランプ政権が全米国外国援助の 90 日間凍結を発令し、PEPFAR も停止対象となった。APCOM は即座に声明を発表し、アジア太平洋地域の HIV 感染リスクが高い集団の健康・福祉・生存に重大な脅威をもたらすと警告した(APCOM, 2025a)。この影響により、2025 年の WPBKK における TestBKK による通常のアウトリーチは実施されなかった。かわって WPBKK 主催者は APCOM の緊急ファンドレイジングキャンペーンに公式に協力した(APCOM, 2025c)。

PrEP はタイでは手頃な価格で入手可能であり、日本など近隣アジア諸国で PrEP にアクセスしにくい参加者が WPBKK への参加に合わせてバンコクで PrEP を入手するという「PrEP ツーリズム」的な行動もみられるという。PULSE の PrEP サービスの特徴として、初回受診時に相談から受取まで約 30 分で最大 12 か月分を処方・調剤可能であること、海外持ち出し可能な医療証明書が発行されること、さらにオンラインでの補充処方にも対応していることが挙げられる。PrEP は毎日服用することで HIV への感染リスクを最大 99% 低減できるとされており (PULSE ウェブサイト)、タイでのアクセス容易性・低価格は日本・韓国・中国など PrEP 普及が遅れる国の参加者にとって重要な医療機会となっている。国際的な商業イベントが各国の医療格差を補完し、当事者が健康管理の主体となる実践を支えるという点で、商業空間が担いうる公衆衛生的機能の一例である。

3-6. 医療スタッフへのインタビュー

調査中、会場の医療拠点 (ファーストエイドチーム) に所属するスタッフへのインタビューを実施した。スタッフは看護師・EMT (救急救命士)・PM (救急救命技術者)・EMR (緊急医療対応者) で構成される。

最も多い対応内容は「傷の処置」と回答された。参加者への安全・健康ガイダンスとして入場時にアレルギー等の健康状態を確認する。体調不良者への対応は気分が悪い場合は休息をとらせ必要に応じてパラセタモール等を投薬、熱中症気味の場合は水分補給・クールダウンを実施する。多言語でのアナウンス・表示を整備しており翻訳者も必要に応じて配置している。「すべての患者 (every patient) に迅速かつ丁寧なケアを」という言葉を特に強調して語った。

インタビューから明らかになったのは、WPBKK での医療体制が「薬物使用への対応」を特別視するのではなく、一般的な救急救命・体調管理の一環として参加者の健康を支えるという姿勢を一貫して保っている点である。「ドラッグ対応」という特別なカテゴリーを設けずに救急体制を統合的に運用する「状態への対応」という姿勢が、ハームリダクションの中核として実践されていた。

3-7. まとめ：商業空間における内在的ハームリダクションの可能性

WPBKK の調査から得られた最も重要な知見は、ハームリダクションが「外から持ち込まれた制度的介入」としてではなく、商業空間の運営・文化・参加者のコミュニティ実践の中から内在的に立ち上がったという点である。入場管理 (没収物の返却)、救急スペースの可視的な配置、多様な参加者同士の相互ケア、医療機関との制度連携—これらが重なり合うことで、参加者はハームリダクションを「特別な支援」としてではなく「この空間の当たり前のあり方」として経験している。

本研究は、WPBKK での観察から「内在的ハームリダクション」 (intrinsic harm reduction) という概念を提起する。これは、商業空間の運営論理・空間設計・掲示物・スタッフ配置・参加者間の相互扶助文化が、独立したハームリダクションサービスを介することなく、空間そのものを通じてケア的效果を生みだしている現象を指す。

従来のハームリダクション研究では、医療・行政機関による専門的介入 (制度的ハームリダクション)、あるいは当事者ピアによる組織化された実践 (コミュニティ主導型ハームリダクション) が中心的な議論対象とされてきた。これらはいずれも、ハームリダクションが独立したサービス・介入として設計・実施されることを前提とする。

これに対し内在的ハームリダクションは、商業空間そのものの運営ロジックの中にハームリダクションが埋め込まれており、参加者が「ハームリダクションを受ける」という意識を持たずにケア的效果を享受する点で区別される。没収物の出口返却、動線上の医療スペース配置、FIRST AID のポップなビジュアルデザイン、ゼロトレランス掲示と PULSE CLINIC 協賛記載の並置。これらはいずれも「ハームリダクションをする」という明示的意図を宣言せずにハームリダクションを実践する、空間の構成的ロジックの現れである。日本の商業空間との最大の相違点は、この「当たり前さ」の欠如にある。

本年度の 3 つの活動を通じた基盤形成から、日本においても商業空間や文化的実践を媒介とした語りの場・ケアの場を段階的に作っていくことの可能性と必要性が確認された。

3-8. 参考文献

- APCOM (2025a). APCOM Statement: The funding freeze is a threat to our community (2025年2月9日).
- APCOM (2025c). White Party BKK gives support to #APCOMpassion Emergency Fund (2025年12月5日).
- Duff, C. (2009). The drifting city: The role of affect and repair in the development of "enabling environments". *International Journal of Drug Policy*, 20(3), 202-208.
- Duff, C. (2010). Enabling places and enabling resources: New directions for harm reduction research and practice. *Drug and Alcohol Review*, 29(3), 337-344.
- Francioni, M. (2023). Not myself tonight: subjunctive selves and the in-sincerity of service in Japanese queer nightlife. *Asian Anthropology*, 22(2), 99-115.
- Ghaziani, A. (2025). The Sociology of Queer Nightlife. *The Sociological Quarterly*, 66(4), 661-674.
- Hilderbrand, L. et al. (2025). The Night is Still Young: A Cross-Disciplinary Forum on Queer Nightlife Studies. *The Sociological Quarterly*, 66(4), 887-909.
- Hughes, K. & Bellis, M. A. (2003). Healthy nightclubs and recreational substance use: From a harm minimisation to a healthy settings approach. *Addiction*, 98(11), 1481-1487.
- McCormack, M. & Measham, F. (2025). Building Back Queerer? Mainstreaming, Commodification, and Intersectional Inequalities in London's Queer Nightlife Post-COVID-19. *The Sociological Quarterly*, 66(4), 700-723.
- Rhodes, T. (2002). The 'risk environment': a framework for understanding and reducing drug-related harm. *International Journal of Drug Policy*, 13(2), 85-94.
- Rhodes, T. (2009). Risk environments and drug harms: A social science for harm reduction approach. *International Journal of Drug Policy*,

20(3), 193-201.

D 考察

本年度に実施したAPCS 2025参加、Day With(out) Art上映会、WPBKK参与観察は、一見すると異なる性格の活動である。しかし三者を横断してみると、いずれも薬物使用・HIV・メンタルヘルス・親密性をめぐる問題が、どのような場に身を置き、誰と出会い、どのような言葉や制度に接続できるかによって大きく規定されることを示していた。商業空間は単なる背景ではなく、健康に関わる行動と語りの条件を形作る社会的基盤である。

この認識を出発点として、本研究はハームリダクションの3つの実装形態を区別する。第一は制度的ハームリダクション(医療・行政機関による専門的介入)、第二はコミュニティ主導型ハームリダクション(当事者ピアによる組織化された実践)、そして第三が本研究の提示する内在的ハームリダクション(intrinsic harm reduction)である。第三形態は、商業空間の運営・文化・参加者間相互扶助が重層的に折り重なることで、独立したハームリダクションサービスを介さずとも空間そのものがケア的效果を生み出す形態を指す。WPBKKの入場口に並置された「WARNING」掲示と「RULES & REGULATIONS」掲示(PULSE CLINIC協賛明記)は、薬物規制レジームへのコンプライアンスと参加者の健康を守る医療連携の双方を同時に成立させる二重構造を象徴している。この形態は、Hughes & Bellis(2003)、Rhodes(2002, 2009)、Duff(2009, 2010)の理論的系譜を継承しつつ、クィア商業空間という固有の文脈における実装として位置づけることができる。

この三形態モデルから日本の現状を眺めると、三形態のいずれもが希薄であり、かつそれらを相互に支え合わせる生態系が形成されていないという構造的な空白が見えてくる。違法薬物をめぐる強い犯罪化とスティグマが当事者コミュニティの組織化を阻み、商業空間における内在的な実践の萌芽も正当性を欠いたまま水面下に潜伏する。本研究の上映会で浮かび上がった「語れなさ」は、この空白が言語の水準に現れたものといえる。興味深いのは、「語れなさ」が支配する社会においては、明示的な語りを必要とせず空間と実践に

埋め込まれた 内在的ハームリダクションの方が、コミュニティ主導型よりも先に根づきうる可能性である。日本のゲイバーやサウナ、クラブといった商業空間における萌芽を可視化し、正当な実践として位置づけ直していくことが、本年度の知見から導かれる実践的含意である。

以上を踏まえると、次年度以降の調査では、本年度基盤形成期に得られた国際比較の視点や「内在的ハームリダクション」に関する探索的知見を手がかりとして、日本の商業空間における実証的記述を段階的に進めていく。同時に、本年度実施した映像上映とトークセッションの成果も踏まえ、文化的実践を通じた「語りの場」の形成可能性について、継続的に検討していきたい。

自己評価

(1)達成度について

本年度は基盤形成期として計画していた3つの活動を概ね予定どおり実施できた。APCS2025では国際的な分析枠組みを収集し本研究の理論的基盤を整備した。上映会は定員に達し当日も満席となる盛況であり、映像を介することで「語れなさ」の構造を可視化しながら対話を成立させるという方法論の有効性を確認できた。WPBKK 参与観察では「内在的ハームリダクション」という本研究固有の分析概念を着想・形成することができた。

(2)研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

学術的意義として、本研究はハームリダクションの3つの実装形態(制度的・コミュニティ主導型・内在的)の区別を提示し、特に従来のハームリダクション研究で十分に概念化されていなかった第三の形態である「内在的ハームリダクション(intrinsic harm reduction)」を、Hughes & Bellis(2003)の healthy settings approach 以来の系譜に位置づけて提起した。国際的意義としては、APCS・WPBKK という2つの国際的フィールドと日本の実践を比較することで、アジア太平洋地域における商業空間のハームリダクション実装の差異を可視化した。社会的意義としては、上映会が市民・専門職・支援関係者の対話の場を創出し、「安全に語る場」の不在という日本固有の課題を公共的に提示したことが挙げられる。

(3)今後の展望について

次年度以降は「内在的ハームリダクション」の概念を軸に質的調査を本格化させる。商業施設関係者・支援機関・当事者コミュニティへの半構造化インタビューにより、日本の商業空間におけるケアの実践とその制約を記述する。映像上映・トークセッションといった文化的実践については、一回性のイベントから持続的な対話の場へと発展させるモデルの検討を進める。

E 結論

本研究を通じて、商業空間における違法薬物と関わる健康啓発およびハームリダクションは、日本社会において決して関心やニーズが低いテーマではなく、むしろ違法とされることでスティグマが強く「安全に語る場」がほぼ皆無だという課題であることが明らかとなった。世界エイズデー上映会が満席を超える参加を得て活発な対話が生まれたことは、映像や文化的実践を媒介とする方法が、スティグマを緩和し、語りにくい健康課題を共有可能なものへと転換し得ることを示している。

一方で、日本では依然として「違法薬物＝沈黙すべき対象」という強い規範が存在し、医療・支援・文化・商業空間のあいだの連携が十分に形成されていない現状も浮き彫りとなった。今後は、こうした文化的取り組みを起点として、制度的支援や現場実践へと接続する具体的方策を検討していくことが重要であり、本研究はそのための基礎的知見を提供するものである。

したがって、本研究が示したのは、「日本では関心がない」ということではなく、「ニーズが存在するが、それを安全に表せる場と言葉が欠けている」ということである。この認識の転換が、今後の研究と実践の出発点となる。

F 研究発表

Oshima G. Queering Field(work): Kawaii Masculinity and the Embodied Making of Togetherness in Nightlife. Doing global fieldwork in turbulent times - Approaches, challenges and opportunities in qualitative research. Palgrave Macmillan. 2026 forthcoming.

大島岳「まだ知らない自分や他者の人生とつながる——HIV 陽性者のピアサポートの意義と実践——」『日本健康教育学会誌』34 巻 2 号(2026 年 5 月末日刊行予定)

G 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし